

「肝硬変と肝腫瘍 集学的診療をめざして」

旭川医科大学教授 水戸 迪郎 編集
京都府立医科大学教授 瀧野 辰郎

41 氏分担執筆

順天堂大学教授・第2外科

杉 浦 光 雄

本書をまず手にとってパラパラと数頁をみた。ところが、内容の生き生きしているのに驚いたのも1つであるが、斬新な内容と迫力とで迫ってくるものがあり、興味深く半日かかって読み通させられた。

とにかく、良い内容、良い企画で、時代の先端に行くよりも、更にその先の先取りの感じであり、一気に読み通して飽きないの一語につきる。編集された水戸迪郎教授、瀧野辰郎教授のお2人とは親しくさせていたでいるが、あまり親しすぎて、このようなすばらしい企画、編集をなさるのにはまた大変な驚きと心からの尊敬の念を抱かざるを得ない。

序にも書かれているように、執筆者の1人1人が、御自分の豊富な診療経験や、多大の研究成果をもと

して、独自の 見解を 教科書的でなく、編集者の 取り上げられた27題について記述されているのが、一見して生き生きした内容と感じさせる原因と思われた。

27題の中で、先取りで今後問題となると 思われた のは、12の食道静脈瘤の内科療法と外科療法のcost effective analysis (水戸教授)である。この項にも記載されているように、欧米ではこの種の論文は数年で数百篇発表されており、食道静脈瘤に関しても数篇みられている。今後の高騰する医療費を考慮に入れて、cost effective analysis を行い診療方針を決めるのも、これからの1つの考え方と思われ、殊更の敬意を表する次第である。日本の戦後の医学の進歩の過程で、当初はアメリカの

多額の研究費に驚嘆し、次に日本の健康保険の発達から診療のために限りなく医療費がつきこまれ、猛烈な臨床医学の進歩がみられた。今後はcost effective analyses を行いながら、医療費や、診療方針の見直しをする時代に移り変わる可能性が呈示されたものと考えられる。

本書の題目は“肝硬変と肝腫瘍”ではあるが“肝炎から肝臓まで”という意味で読み始めると、トントントンと読みすごして行く 感じである。1つの疾患の流れとしても捉えており、それぞれの過程の中での今日的な課題を取り上げ、これを枝葉として横に広げながら一気に終点の肝臓まで滔々たる大河のごとく進んでいく様は壮観である。

内科医、外科医に限らず、集学的診療を目指すという方針を見事に達成されているように思われる。肝臓の臨床に興味のある医師は是非とも一読されんことを切にすすめる次第である。私自身も半日で大変な勉強をさせていただいたことに心から感謝している。

B5判, 364頁, 1984年
9,500円, 送料350円

医学書院 刊